

本日の学び テーマ：「大いなる光」 イザヤ9章1-6節

【理解の手がかりとして】

E・フロムの言葉「希望を持つということは、まだ生まれていないもののためにいつでも準備が出来ているということであり、新しい生命のあらゆる徴候を見つけて、それを大切にし、まさに生まれようとするものの誕生を助けようと、いつでも準備をととのえていることである。」(『希望の革命』より)

希望とは、既にあるものではなく、未だ実現していないものを待つこと。しかしそれは実現しようのないものに期待を掛けるのではなくて、人間が思うところの現実の限界を必ずや打ち破って実現して下さる神を心から信頼して待つことである。

「原爆櫨」の話から。——櫨（ヒノキ）というのはとても大きな木であるが、この櫨は原爆で被爆して、根元からなぎ倒されたのだが、その「切り株」からもう一度、芽を出し成長し、現在でも立派に立っているのだそう。「切り株」からの希望、このことはイザヤの預言を思い出させてくれる。「エッサイの株からひとつの芽が萌えいで、その根からひとつの若枝が育ち、その上に主の霊がとどまる」(イザヤ 11・1-2)

エッサイとは、ダビデの父の名。ダビデ王朝は、このイザヤの時代には北王国と南王国に分裂し、その北王国はアッシリアに、南王国はバビロニアにやがて滅ぼされる運命を辿る。「切り株」とは、終焉を迎えたダビデ王朝のこと。けれどもその「切り株」から、新たに、そしてそれは全く違った「若枝」が生まれることを告げたのである。そうその「若枝」こそ、来るべき「メシア（救世主）」、永遠に統治される平和の王様のことである。

イザヤは言う。「見よ、おとめが身ごもって、男の子を産み、その名をインマヌエルと呼ぶ」（イザヤ7・14）と。そして続けてこう言う。「（彼は）災いを退け、幸いを選ぶことを知るようになるまで、彼は凝乳と蜂蜜を食べ物とする」（イザヤ7・15）と。「災いを退け、幸いを選ぶ」方、それがインマヌエルであられるということ、この「幸いを選ぶ」という言葉から、イエス様が語られた山上の説教を想起する。→マタイ5・3-9

「心の貧しい人々」「悲しむ人々」「柔和な人々」「義に飢え渴く人々」「憐れみ深い人々」「心の清い人々」そして「平和を実現する人々」、そう、ここにインマヌエルなる方の幸い（祝福）がある。

イザヤは、9章1～6節に、この生まれるインマヌエルはどういうお方であるのか告げている。今「闇の中を歩む民」（9・1前半）は彼の中に「大いなる光」（同節）を見る。今「死の陰の地に住む者の上」（9・1後半）にも「光は輝」（同節）かせられる。彼は平和の国をもたらし、戦争のための武器を焼き払われる。詩編の詩人が歌うように「貧しい人々を治め、乏しい人の子らを救い、虐げる者を碎（く）」（詩編72・4）救い主である。

イザヤ11章1～9節を見れば、その平和の王たるインマヌエルの姿がさらに分かる。この方は神の霊に満ちておられる方。「知恵と識別の霊、思慮と勇気の霊、主を知り、畏れ敬う霊」（11・2）、この霊に満ちておられる方である。それによって彼は、貧しい人々に正義をもたらし、悲惨な人々を正しい判決によって救い、虐げる者たちを打ち碎かれる。そしてその正義の国は、ただ貧しい人々だけを含むのではなく、全被造物に平和がもたらされるとある。人間と動物の間、動物と動物の間にも平和が打ち立てられる、と（6-8節）。

強者が力づくで「見せかけの平和」を形づくろうとし、それによってますます弱者の抵抗が激しさ

を見せる今日の世界情勢に対し、全く反対の平和を訴えている。強者が弱者に対して憐れみを持つところ、その傲慢が砕かれ、小さきものを守っていくところ、その「共生」が生まれるところにインマヌエルがある、神が共におられる、ということである。このような国をお造りになるために「平和の君」は来られる。——「最も弱くされた人々がいる場所こそ神の働く場所です」（『聖書教育』聖書の学び～暗闇の中を歩む民）

イザヤは言う。「その王国に権威は増し、平和は絶えることがない。王国は正義と恵みの業によって、今もそしてとこしえに、立てられ支えられる。万軍の主の熱意がこれを成し遂げる」（9:6）——この「主の熱意」の表れが「ひとりのみどりご」イエス・キリストであられる。

「主は国々の争いを裁き、多くの民を戒められる。彼らは剣を打ち直して鋤とし、槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かって剣を上げず、もはや戦うことを学ばない。ヤコブの家よ、主の光の中を歩もう」（イザヤ2・4-5）——「主の光の中を歩もう」との呼びかけ。これがパウロの呼びかけとも響き合う。「闇の行いを脱ぎ捨てて光の武具を身に着けましょう」（ローマ13・12）。

暴力や偽り、絶望を生むような武具ではなくて、平和を保証し、神の正義を築き、諸民族・諸国の間に隣人愛を創造する武具のことである。人間はその歴史の中で、争いと暴力という手段から自由になることはなかった。だからパウロは次のように奨める。「主イエス・キリストを身にまといなさい。欲望を満足させようとして、肉に心を用いてはなりません」（ローマ13・14）と。